
ファンタシースターポータル2 鬼神と少女のモノガタリ

オンドゥル侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2 鬼神と少女のモノガタリ

【Nコード】

N9276Z

【作者名】

オンドウル侍

【あらすじ】

フリーの傭兵、アダム・マクスウェルは、海底レリクスで一人の少女と出会う。そして、それをきっかけとして、彼はグラールの存亡をめぐる、戦いのさなかに投げ出されていく。仲間たちと共に歩む、彼の物語が始まった…

PSGの前の話みたいに書きました。アダムと言うキャラが、個人的にそこそこ気に入っていたからです。

FIRST UNIVERSE / ハジマリ (前書き)

えー、懲りずにまたファンタポ小説です。駄文ばかりですがよろしくおねがします。

FIRST UNIVERSE / ハジマリ

「これだけの人数が集まってるって事は、大手のスポンサーがついてるってことだな。久々に儲けられそうだな。」

海底のレリクスでそんな言葉をかけられ、アダム・マクスウェルは読んでいたヤング ヤンプのページを閉じてナノトランサーに放り込んだ。彼に声をかけたのはキャストの男。あくまで見た感じの印象だが、それなりに手誰っぽく見える。

「みたところ、お前も傭兵の様だな。」

「ああ、そうだな。アダムって言う。フリーの傭兵だ。」

「ほう、そりゃ大したもんだ。…待てよ？アダム…ひよっとして、元ガーディアンで、『鬼神』と名高い…」

「その呼び名は止めてくれ。嫌いなんだ。」

アダムはそのキャストに向かって、嫌悪感を込めて顔をしかめて見せた。

「ああ、すまない。…そう言えば、このレリクスは、つい最近発見されたものだったな。」

「確かな。調査もまだほとんどされてないって話だし。このあたりは安全みたいだけど、奥はまさに、未開の地ってわけだ。」

アダムも詳しい事はあまり知らない。クライアントからは最低限の説明しかなされていないからだ。任務を速やかに遂行するために、もう少し情報があってもいいものだが。

と、その時だった。

「帰ろう、帰ろうって！」

そこに響いたのは、あまりにも場違いな少女の声。その主はすぐに見つかった。

「なんだ、あの子供は？腕利きの傭兵の様には、とても見えないが

…」

「…だな。明らかにいやがってるし。」

その少女は、セーラー服に似た赤いジャケットを着込んだ、金髪の娘だった。どうやら上司らしいビーストと話していたが、その男は彼女に何か言つと、そこを離れて行くのだった。

「やっぱ…やだ…此処…やだよ…」

「ハア…」

アダムは彼女を見て、小さくため息をついた。明らかに、こういう経験は乏しい。ぐずる彼女に少しいらだっていたのもあるが、全く、こんな命令を出した上司の顔が見たい。そんな思いを巡らせていた時のことだった。

「うっ…！」

突然、その少女が頭を抑えてうずくまった。何か、苦しそうだ。

「お、おい、大丈夫…」

アダムが彼女に近づこうとしたその時だった。

ずうううううん……

遠い音とともに、そのレリクス全体が揺れた。そして、ブザーのような音が辺りに響く。

「…！？」

すると。

「おい、何かまずいぞ！」

「逃げる、閉じ込められる！」

そのフロアの入り口の扉が、ゆっくりと閉まろうとしていた。

「…オイ！お前！大丈夫か！？逃げる！」

アダムはその少女の背中を叩いた。すると、振り返った彼女は閉まってゆく扉に気付いた。

「走れるか？此処を出るぞ！」

「え？あ、うん…」

少女の手を引っ張って、アダムは全力で走った。だが、その扉は、アダムがそこに到達するほんの一瞬だけ前に、思い音を立てて閉じ

ていた…

「出して！出してよー！このツ、このやろ、開きなさいよー！」

少女が、扉を拳でガンガン殴りながら、あがき続けている。だが、レリクスは頑丈な扉を、少女の細腕で開けることなど、当然かなうはずもない。

「ハア…此処はやばいってあれだけ言ったのに…何で聞いてくれな
いかな…」

そして、少女はアダムの方を向き、すぐるような眼を向けた。

「…その目はアレか？俺にこの扉を壊せと？…無理だな。レリクスに歩兵用の武器で傷をつけるのはかなり難しい。俺の手持ち武器じゃ、まあまず無理だな。」

「そっか…」

「…此処から出るんなら…別の入り口を探した方が手っ取り早いかな。」

そう言っただけ進むとするアダムを、少女はぽかんとして見つめていたが、その意味に気付くや、必死で彼を止めようとした。

「え…？って、まさかあんた、奥に進む気！？無理無理、ヤダヤダ危ないって！ここ、未開のレリクスなんだよ！すごい危ないんだよ？」

「俺はプロだ。レリクス調査くらい何度も経験してるっつーの。行きたくないなら、とどまればいい。」

「あ、行くから！あたしも一緒に行く！」

そう言っつて小走りで付いてくる少女だったが、ふと足を止めると、
アダムに話しかけた。

「そう言えば、名前、聞いてなかったね。あたしはエミリア。エミ
リア・パーシバル。」

「アダム・マクスウエルだ。アダムでいい。」

「ふ、ふーん…あんだ、そういう名前なんだ…その、これからは
らくは一緒だから、よ、よろしくね…」

それが、『彼』と『彼女』の出会いの時だった。

SECOND UNIVERSE / 翼を抱いた少女 (前書き)

アダ無双いきますよ。

SECOND UNIVERSE / 翼を抱いた少女

「うあああやっぱり原生生物がわんさかいる…見逃してくれたり、しないよね…」

「つたりめーだ。」

目の前にいたのは、エビルシャークがざっと4体ほど。こちらにはまだ気づいていない様子だが、それも時間の問題だろう。

アダムがタイミングを計ろうとしていると、エミリアがよわよわしい声を発した。

「あの、あのさ、直前でこんなこと言うものなんだけどさ。……あたし、武器は持ってても、実は戦闘経験なんてほとんどないの…」

「…だらうとおもった。そうでなきゃ、あの程度の雑魚にビビるはずねえもんな。」

「雑魚つて…まア、そういう訳だから…頑張つて！あたしは応援してあげるから！」

「ハア…。ま、いつか。」

ため息をひとつつくと、アダムは前に進み出てナノトランサーに手を伸ばす。すると、そこから発せされた白い光が彼の両手を纏い、次第に凝固して、空色の光刃を持った双剣、グランドクロスへと変化する。

「……ハアッ！」

気合い一閃、アダムがエビルシャークに飛びかかった。まず最初に1体の振りあげられた右腕をすれ違いざまに切り捨て、反対側から襲ってきたもう1体の胴を、返す刃で真つ二つに両断する。右腕を切られたエビルシャークがめちゃくちやに腕を振り回して襲ってくるも、胴から突き出た頭部を空色の光刃で斬り飛ばされ、そして続いて、残りの2体との距離を一気に縮めるや、近くにいた個体を頭から斬り裂き、最後に1体は肩に刃を突き刺された後斜め下に掻き斬られて、糸の切れた人形のようにどさりと転がる。

「おーい、もう大丈夫だぜ。」

アダムは安心させるようにエミリアに声をかけたが、彼女の様子がおかしい。顔はかなり青ざめ、見るからに気分が悪そうだ。

「お、おい、大丈夫か…?」

「……ゴメンアダム…ちょっと向こう向いてて…うつぶ…」

「ま、まさか……」

その、まさかだった。エミリアはその部屋の隅っこの方に行くところまで四つん這いになった。アダムがグランドクロスを置いて近寄ろうとしたときには、彼女は絶賛スーパーゲロゲロタイム中だった。

「うえっ…うげ…おええええええっ、ええええええええっ……ハア

…ハア…ゴメン…あたし…こつ…こつ…こつ…こつ…こつ…こつ…こつ…こつ…こつ…

…」

「ハア…つたく。」

アダムは、彼女が今まで、どれだけ戦闘と無縁だったか改めて思い知らされた。まあ、確かに少しばかり自分がスプラッタにやり過ぎたものがあるが。

「ハア…ハア…もう大丈夫…うつぶ…」

エミリアは何とか立ち上がろうとしたが、床に飛び散ったエビルシャークの緑の血や切り裂かれた肉を見て、再び戻しそうになった。「向こうは見るな。つたく…女の子でも吐くもんは吐くんだな。」

「う、うるさい…」

エミリアは青い顔で、アダムの後を小走りに追って行った。

その後は、特に何事もなく進んでいった。エミリアも次第にグロイのには慣れていったらしく、やがて吐く事も無くなった。

「すごい…流石傭兵って感じ…。なんか、ほっとしたよ。あんといれば、安心っぽいからさ。あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とかこれっぽっちも無かったのに…。」

しかし、此処まで見てきた印象だったが、エミリアの筋はアダムからするとそう悪くは無かった。適切な指導を受ければいくらでも伸びるだろう。

「なのにあのおっさん、あたしが働かないからって、無理やり連れ出して、こんな危険なレリクスにほっぽって…あゝ、何かだんだん腹立ってきた！こんな弱い女の子を一人にするなんて、ひどいと思わない？」

エミリアはかなり腹を立てていたが、アダムはそっけなく言い返した。

「…いや、絶対、働いた方がいいな、それ。もとをただせば原因はお前だろ？」

「ぶー、何よ、アンタもおっさんの味方？いいよ、結局みんなそうなんだから。…あたしの言う事なんて、誰も信じてくれないんだから…。」

今の言葉に、アダムは何か引つかかるものを感じたが、今は脱出が最優先だ。聞こえなかったことにした。

「とにかく！あんたがいれば無事に帰れるような気がするし、おっさんには後で文句言いまくってやる。SEEDはもう存在しないからレリクスは安全だとか言って、あたしの言う事まともに聞いてくれないしさ。…そりゃ、今までに発見されたレリクスは、SEED襲来があった時ばかり、機能を覚醒させたよ？でも、全部がそうだったかって言うと、それでも無いんだよね。」

突然、エミリアが学者よろしく意見を淡々と語り始めた。アダムはそれを黙って聞いていた。と言うより、全く付いていけなくてぼかんとしていたと言った方が正しいだろう。

「一説によると、SEEDの散布する素粒子に反応して起動しているみたい。でも、同時に磁場の乱れも観測されるから、どうもそれだけじゃないと思うんだよね。そもそもSEEDは三年前に一掃されたはずなのに、現にレリクスはこうして起動してるわけでしょ？レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上、トリガーとなるものも、それに準じた…」

とここまで語って、エミリアはポケっと聞いているアダムに気付いた。

「あ…えつと…」

「詳しいんだな。」

「えつと…こ、この位常識でしょ？うん、常識！傭兵だったら、この位は知ってて当然なの！…良いよ、今のは忘れて。あたしの言う事なんて、誰も信じてくれないんだし。」

「いや、ゴメン、もうちょっと詳しく聞かせてくれないか？」

「詳しくって…当てもない推論なんだけど…もしかして、信じてくれているの…？」

エミリアは少し驚いている様子だった。彼女のここまででのアダムの印象は、そっけなくて淡々とした無機質な戦士、と言った感じだったが、どうやら少しそれも改めたらしい。

「いや、俺には内容は何となくしかわからないけどな。なんせあんまり頭は良くないから。」

「そ、そう…って、こんなこと話してる場合じゃない！とにかく、先に進もう！」

それから1時間と経たずに、二人は何やら広い所にたどりついた。
「ずいぶん奥まで来たけど、まだ出口見つからないの?」

「中心部から通路が網目状に伸びてるのが普通だからな。こりゃもうちよつとかかるぜ。」

「この周りで見えてるのつてさ、全部大型の自立起動兵器だよ……」
エミリアが言っているのは、壁際に立っているモノの事だった。
一見すると石像の様にも見えるが、それは旧文明の技術が詰め込まれた、自立起動兵器だった。大きな斧を持ち、見るからに殺傷力もありそうだ。

「ただでさえこつち見てて怖いのに、もし動き出したらつて考えると……ねえ、早く行こうよ。」

「オイ……そう言うこと言ったら、その直後には大抵……」

アダムは、そこで言葉を切った。理由は簡単。その内の1体が、軋むような音を立てて本当に動き出したからだ。斧を構え、うおおおおおおおおん、と聞く者を震撼させる様な咆哮を上げる。

「ちよつ、冗談でしょ!言つたそばから動き始めないでよ!」

「だから言つたんだよ!もし動き出したら、なんて言つたら、その直後には本当に動き出すつて相場は決まってるんだよ!つたく……こりゃ、戦うしかないな。」

「や、やつぱさうだよね……?」

「大丈夫だ。俺自身、腕に自信はあるし、それにお前の動きも悪くは無かった。」

「え?」

「自身持て!と言うか、相手は待つちやくれねえぞ!」

エミリアは一瞬、茫然ととしていた。

「……うーッ!うううーッ!……分かつた。あたしも覚悟決める。
あんたのその力、信じるよ!」

その兵器、スヴァルティアは、早速大斧を振りかざして襲いかか

つてきた。でかい凶体に似合わず意外と動きは素早かったが、二人は横つとびに飛んでかわし、エミリアは持っていたロッド、クラール・ヴィサスから火球や雷撃フレイエを乱射する。が、スヴァルティアは蚊に刺されたほどのダメージも感じていない様子だった。

「ウソっ!？」

アダムはグランドクロスを構えて様子を見ていた。そして、相手の動きをある程度つかんだ後、武器を大型の槍、ゲキツキナアタに変え、同時に黒い銃身の拳銃を取り出してエミリアに投げ渡した。

「エミリア！俺が奴の注意をひきつけるから、それであいつの頭にゼロ距離で最大出力の光弾をブチ込んでやれ！スタティリアの制御系統は頭に集中してるから、それで何とかなる！」

「え…あたしが!？」

「お前じゃ囷は務まらないだろ！だから俺がやるんだよ！」

「あ…分かったわよ！」

アダムはその言葉を聞くや否や、槍を手にしてスヴァルティアに飛びかかった。敵の周りを飛びまわり、攻撃的を絞らせない。そして隙を見て、敵の装甲にダメージを与える。スヴァルティアにしてみればうるさい蜂にまとわりつかれたようなものだ。斧を振り回してアダムを捉えようとするものの、やはりこれだけのサイズがあると小回りが利くとは言い難かった。そして、鋭く突き出した一撃が右腕の関節を捉え、スヴァルティアの前腕が重たい音を立てて地面に落ちた。いくらスタティリアと言えど、大斧を片手で振り回すのは難しいはず。これで相手の戦闘力は大幅ダウンだ。

「さあ…どうした…？」

スヴァルティアは方向を上げながらアダムに襲いかかるうとした。
だが。

「ハア…ハア…本命は…こっちだっつーの！」

エミリアが、腕を落とされた時をねらってスヴァルティアのボディによじ登っていた。そして、その頭に銃口を押しつけ、さっきまで押しっぱなしにしていた引き金を叫びながら離れた。

「あああああああああああ！！！！！！」

瞬間、スヴァルティアの頭部で高圧エネルギーが爆ぜた。頭を失ったスヴァルティアはよろめきながら地面に倒れ、エミリアは爆発の衝撃で吹き飛ばされたが間一髪、アダムに抱きとめられた。

「ハア…ハア…ハア…生きてる…？あたし…生きてる…？」

アダムは肩で激しく息をつきながらエミリアを下ろした。

「やった！やったよ！あんなでつかいのを倒しちゃった！すごい！本当にすごい！あんたを信じて良かった！やった！やったあ！」
しかし。

「！！」

「え…」

倒れたはずのスヴァルティアが身を起こし、左手の鋭利な鉤爪を振り上げていた。

アダムはなにも考えなかった。

何も考えず、身を投げ出していた。

何も考えず、エミリアを突き飛ばした彼は、その後どうすべきか、全く頭に無かった。

最後に見たのは、自分目掛けて振り下ろされる、スヴァルティアの鉤爪だった。

彼は、目を閉じた…

ドシユッ……

「…やだよ…どうしてあたしなんか…庇って…起きて…ねえ、起きてっば！」

エミリアは、自分の顔に血飛沫が飛んだ事にも気付かず、自分の手が噴き出す血で汚れるのもかまわず、倒れたアダムの体を懸命に揺さぶるが、無駄だった。鋭利な爪で胸を深々と切り裂かれ、鮮血を辺りに撒き散らしてアダムは即死していた。刻まれた切創から、体の中も見えた。

「…どうしていつもそうなの！？皆あたしを置いて行っちゃうの！？あたしを置いていかないでよ！一人にしないでよ！お願いだから…目を開けてよ…」

エミリアは、後ろで古代の機械が立てる音が響いているのを、ぼんやりと感じていた。

「誰か…誰でもいいから…：…助けてよオッ！」

とたん、目もくらむような金色の閃光が、その部屋を満たした。エミリアの顔や手、足に、金色の文様の様なものが走り、背中に、オーラだったかアウラだったか知らないが、とにかくそんな光の輪が現れる。そして、目もくらむような光を浴びたスヴァルティアが、

散ってゆく紙吹雪の様に消えて行った。

そこに立っているエミリアが、言葉を発する。しかし、その声はエミリアの様なものではなかった。もっと深い、深い声……

『……貴方を、死なせはしません！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9276z/>

ファンタシースターポータル2 鬼神と少女のモノガタリ

2011年12月29日16時47分発行